

文豪先生

bungousensei

第一話

中川善史

絵・かないてつお



ある辺鄙な辺鄙な辺鄙な都会から遠く離れた山に囲まれたある村に、山田文豪という作家の先生がおりました。

銀縁の眼鏡を掛け、鼻の下には髭など生やし、いつも和服の着流しで、今風の作家とかライターとかいう言い方よりは、「文士」と昔風に呼んだ方がいいような風貌でありました。

文豪先生は、ちいさな家に小さな召使いと一緒に暮らしていました。男の子とも女の子ともつかない唐子の格好をした小さな召使いは、龍龍（ろんろん）と言いました。



もともと文豪先生は、都会で暮らしていたのですが、貧乏が困じた挙げ句、この辺鄙な辺鄙な村にある家にやって来たのです。古びた和服の着流しにスツテキ、カバンが一つという姿、他の荷物と言っては書物ぐらいのものでした。

この家は、家賃がただでした。というところ、いかにもおんぼろの家を想像されるでしょうが、古い田舎家とは言え、部屋数はいくつもある家です。

そのうえ、給料がただの召使いがついていました。

文豪先生は、喜びました。普通の人は、こういう「うますぎる」話には警戒心を持つものですが、そんなことは気にしないところが文豪先生の偉いところでしょう。家賃がただでさえあればいいのです。

もしかしたら、ただのケチなのかもしれませんが。

ろんろんも、喜びました。なかなか、自分を召使いとして雇ってくれる人なんて、いなかっただからです。

なにしろ、辺鄙な辺鄙な辺鄙なこの家以外に住むのはいや、給料を貰うのはいや、男の子だか女の子だかわからない上に、ろんろんなんて変な名前、などという召使いは、なかなか雇ってくれる人がいなかったのです。

「先生、わたし、ろんろんは、うれしい」  
「そうかね」

と文豪先生は髭をひねりながら、  
答えます。

「先生ご主人様で、わたし召使いだ」  
「うん」

ろんろんのうきうきした様子に引き替え、

文豪先生、相変わらず愛想がありません。

「だから、わたし、ろんろんのこと尊敬しろ」  
「なに」

と、文豪先生は怪訝な顔になりました。

「ご主人様は、召使いを尊敬する。だから、先生、わたし、ろんろんを尊敬しろ」



少し考えてから先生は、

「わかった、尊敬する」

「すごく尊敬しているか」

「もう、この上ないほど尊敬しているな」

そういうと、ろんろんは畳の上転がって、あつちへころころ、こつちへころころ……。

「んーんー」

「ど、どうした」

今度は文豪先生も、少しびっくりしたようです。

「わたし、ろんろん、うれしい。ろんろんのこと尊敬する人、先生が初めて」

「そうか」

「先生、なにか、尊敬の証拠を見せて」

そう言われて、文豪先生、ちよつと首をひねっていましたが、

「よし、じゃあ、尊敬しているから、お茶を入れてこい」

「わかった」

と、ろんろんは、うれしそうに飛ぶように台所に行つて、踊るよ

うにお茶を入れて、滑るように持つてきました。

「それから、全部の部屋を掃除しろ。屋根裏も床下もだ。そのあと、庭の草むしりをして木の枝を払って水を撒いておけ」

と、文豪先生、うまそうにお茶をすすりながら、「尊敬の証拠」を繰り出します。ろんろんは、

「尊敬しているか」

と、先生の顔をのぞき込みながら確認しました。

「している。ものすごいしているぞ」

「よし」

ろんろん、つむじ風のように、くるくると働き始めます。

「それから、風呂を沸かして、飯を炊いて・・・ええ、あと、家の中の壊れているものはみんな直しておけ。きれいにするんだぞ」

「尊敬は？」

「してるしてる」

こうして、文豪先生とろんろんの生活が始まりました。

ある日、文豪先生は、散歩に出ることにしました。出がけに家の

中を振り向いて、

「ちよつと、行つてくるよ」

ろんろんは、その時、居眠りをしていたので、尻尾の先をちよいちよいと振つて挨拶をしました。「気をつけ  
てね」という意味です。「遅くならないでね」という  
意味もあります。「今晚は、焼きうどん  
だよ」という意味もあります。

(言い忘れましたが、ろんろんは、尻尾が  
あります)

(もうひとつ付け加えると、それも、雇い  
主がなかなか見つからなかった理由なの  
だそうです)





辺鄙な辺鄙な辺鄙なところだけに、空気は新鮮で空は澄んでいます。ときどき木々のざわめきが聞こえます。しかし、風が止んでしまうと、それさえもしんとしてしまつて、自分の足音とこつこつというステッキの音しか聞こえなくなるくらい静かです。

文豪先生は、なにやら思索にふけりながら、野の小道を歩いていました。何を考えていたのでしょうか。夕食の焼きうどんのことでしょうか。

・・・と、突然、

「おい、ちよいと先生」



と言う声が聞こえました。

ずぎつ、と草履が土をこする音をたてて、文豪先生は立ち止まりました。

「先生、文豪先生だね」

もう一度声が聞こえました。

文豪先生がその方を見てみると、道の傍らに石のお地藏さんが立っていました。

「ほう、こんなところにお地藏さんがあつたのか」

と、独り言を言いながら、そつちの方に寄つていきます。

「よう、先生」

と、また声が聞こえます。石のお地藏さんが、目をくりくりさせて文豪先生を見上げており、その口から言葉が出ているのでした。「はて、今まで地藏に気が付かなかつたのか、それとも今まで通つたことのない道に出てしまったのか」

と先生は、地藏の声など耳に入らなかつたかのようにつぶやきます。

「なあ、先生、返事してくれよ」

「こここのところ、ろんろん以外の人と話をするのがなくなつてしまつたが、なんだか、お地蔵さんに話しかけられているような気がするなあ」

と、文豪先生は、溜息をつきました。

地蔵の方は、少々ムキになつたような声で、

「だから話しかけているんだよ」

「石のお地蔵さんが話しかけてくるわけではないから、気のせいだろう」

「気のせいじゃないよ」

「気のせいだ」

「こいつ、わからないやつだな。気のせいじゃないって言っているだろう」

地蔵がじれつたような声を出しました。文豪先生の方も、少しいらつと来たよう形で、強い調子で、

「気のせいだよ、石の地蔵が話をするわけではないだろう」

「じゃあ、あんた、今誰と話をしているんだよ」

「今、誰と……誰だろう……」

先生、ぽかんとして地蔵を見つめます。

「よく見ろ。あんたの前にいるものを、よく見てみる」

「前にあるのは地蔵だが、地蔵と話ができるわけがないし」

「話をしているんだよ。しつかりしろ」

すると、文豪先生は初めて気がついて、

「あれ、本当だ、話をしているなあ」

「なんだと思つていたんだい」

「いや、自問自答しているつもりだったんだ」

「そんな自問自答があるかい。あんたは、地蔵、つまり俺と話をしているんだよ」

「なんだか、そんな気がしてきた」

文豪先生、あくまで呑気なものの言い方です。

「ぼんやりしたやつだな」

と、今度は地蔵の方が呆れました。

「なにしろ、はじめてなものだから………じゃあ、行くか」



そう言うと、先生は後ろを向いて歩き始めようとしてきました。

「おい、先生、先生」

地蔵は慌てて大声で呼び止めます。

「なにか」

「行つちやうのかよ」

「うん」

「あんたねえ……」

と、地蔵、やや困つたような調子で、

「石の地蔵と初めて話をしたと言うことに関して、驚くとか、なにか感慨を抱くとか、なぜ石の地蔵が自分に話しかけてきたのだろうか、とか、そういうことを思わないのかい」

「うーん」

と文豪先生は、腕組みをして澄んだ空を見上げます。上空をトンビがピーひよろと鳴いて舞っています。

「驚かないのかい」

そう地蔵が聞くと、

「いや、そうじゃなくて……今までは、自分が石の地蔵と話をする

なんて思ってもみななかったが、いざ、現実起こってしまおうと、あまりに普通なんで……」

「張り合いのない人だなあ」

少し、調子が弱くなりました。先生の方は相変わらず落ち着いた口調で、

「いや、あまりに普通なんでびっくりしている。衝撃と言ってもいいいな」

「変わった驚き方だな」

「じゃあ、私はこれで」

また、文豪先生はそれだけ言うと、行こうとします。

「おい！行くなよ」

「私は忙しいんだが」

「嘘をつけ」

「なんでわかる？」

と、先生の眼鏡の奥の目が丸くなりました。地蔵は、

「あんた、どっから見ても忙しそうには見えないよ。なあ、おいらの話を聞きなよ」



「聞くのか？どうしても？」

「あのねえ、あんた、石の地藏に話しかけられるとい  
う、普通、現実には起こりえないことに出会ったんだ  
ぞ」

「どうして出会ったのかなあ」

「どうも、本当は文豪先生も困っているようなのでし  
た。地藏は、

「ううう……この事実に対して、この幸運に対して、  
もうちつと謙虚な態度が取れないものかねえ」

「具体的に言うとう？」

「具体的に言うとう……なんで、俺があんたに話し  
かけたか、その意味を考えてみるよ。つまり、俺が何  
を望んでいるのか、をよ」

「地藏の望み？……ああ、なんで私は石の地藏なんか  
と話を始めちゃったんだろう」

「それが、謙虚じゃないってんだよ……。いいか、こ  
れは普通の人には、まず経験出来ないことなんだぜ。し

かも、あんた、作家だろう。だつたら、こういう滅多にない経験は、ぜひじっくり味わつて文章に残してやろうとか、後世に書き残すべきだとか、そういう風に思うべきじゃないのか？もつと、主体的な関心を持つて向き合ふべき事なの！

さらにだよ、おいらは地蔵だよ。仏だよ。一切衆生を救う仏だよ。その本来なら人の望みや苦しみを聞く立場の仏がだよ……」  
と、地蔵、一気にまくし立てますが、文豪先生、疲れたように、「この話、まだ続くのかい」

「黙れ！……その仏ともあろうおいらが、他ならぬあんたに、自分の望みを打ち明けようつてんだよ。滅多にある事じゃないんだよ」  
「正直言つて荷が重いんだけど」

「だからつて帰るのかい」  
「まあ、帰つてひと眠りしたら、なんだ、夢だつたか……と、なるんじゃないかと思つて」

地蔵、ついに怒つて、  
「があーっ、現実逃避かよ！……いいか、聞けよ。おいらはね、おいらのために作品を書いてもらいたいんだよ」

それを聞いて文豪先生、しばらく腕組みをしていましたが、

「……もしかして、原稿の注文？」

「そういうことだよ。おいらな、ずーつと、ここに突っ立ってんだよ。どこへも行かず、なにもせず、同じ風景を来る日も来る日も見ているんだよ」

「石なら当たり前だね」

「だから、退屈なんだよ、おいらは。なあ、作家先生、おいらの喜びそうな小説を書いてくれよ」

「そんなこと言われたって、どうすれば石が喜ぶかなんて考えたこともないものなあ」

「だから、おいらが主人公の物語とか」

「主人公だったって、あんた、石でしょ」

「石だ石だ言うな！ただの石じゃないの。石の仏。石仏。野の仏。

なんか趣があるじゃないか。情緒があるじゃないか。素敵じゃないか。詩や物語を誘うじゃないか」

「ふーん」

と、文豪先生、そっけなく言います。



「なんだ、ふーん、て。お前、本当に作家か」  
それを聞くと、文豪先生も少し挑発された  
ようで、開き直ったような口調で、

「作家だよ。あんたが、石の地蔵である  
ようにね」

地蔵の方は、それを聞いて嘲笑するように、  
「おいらが石の地蔵であるのは確かだが、  
あんたは作家だって言えるのかな。作品書いて  
ないだろう」

「どきっ」

「なあ、作品書いていない作家が作家と  
いえるのかな」

「し・・・しかし、あんただって、人を救って  
いないだろう」

「どきっ」

「人を救わない仏が仏と言えるのかな」

「ふん、なにも書かない貧乏作家」



「なんだ、仏のかつこうしているだけの石つころ」

「誰も知らない三文文士」

「石蹴りの役にも立たない石の固まり」

「……………」

「……………」

二人の間をひゅうと風が吹き抜けて、山の方へ行きました。

「ま、まて、こんな野原の真ん中、人っ子一人いないところで互いを傷つけ合ってもしょうがない」

と地蔵が沈黙を破りました。

「そうだな」

「なあ、頼むよ、おいらが主人公の物語、書いてく

れよ、頼むよ」

地蔵さん、すぐるようにして文豪先生に頼みます。

といつても、石の地蔵ですから、本当にすがつたりはしませんか。





「先生、お帰り」

文豪先生、家に戻ってきましても、書斎の机の前にどつかと座って黙っております。ろんろんがお茶を運んできまして、

「先生、考え込んでいるな。めずらしいな」

「私だって、考え事くらいする」

「先生が、ものを考えているの、ここへ来て初めての  
ような気がする」

「失礼な。私は作家だ。ものを考えるのが仕事  
みたいなものだ」

「そういえば、先生、全然仕事していない  
「どきっ」」

先生は、ひっくり返りそうになりました。

ろんろんは、にたにたと笑って、

「傷つきやすいな、先生は。ところで、なに



を考えていたんだ」

「実は、石の地蔵から作品を頼まれてしまったのだ」

「そうか。よかつたな」

ろんろんは、石の地蔵から、と聞いても平然としています。

「石の地蔵が頼んだんだぞ。地蔵が読む小説なんて、書いたことがないからな」

「じゃあ、人間が読む小説は書いたことがあるのか」

「そーれーはー、とーつても、しーつーれーなー」

と、先生、顔を真つ赤にします。

「まあ、怒るな。で、地蔵さんの小説書いてやるのか」

「とりあえず、主題歌だけ作って聞かせてやった」

と、先生は妙なことを、しれつとして言いました。

「小説に主題歌があるのか」

と、ろんろんが怪訝そうに聞き返すと、先生は自信たつぷりに、  
「作つたのだ。こういうのだ。」

# 地蔵マーチ

作詞作曲 山田文豪

ぼーくは ヒーロー  
すーぱーじぞう  
わるーいやつらを やっつけない！  
じぞうパンチを くりださない！  
じぞうろけつと はっしやしない！  
じぞうじえつとで とんでかない！  
だって ぼくは いしのじぞう  
めったなことでは うごかない  
よいこがよんでも しらんかおー  
いしだからー



これを、地蔵の前で歌ってやったのだが、どうも反応がもうひとつだったな」

「先生、それを歌ったのか」

ろんろんが、呆然とした顔つきで聞きました。

「うん。踊りも踊ったぞ」

と、先生の方は動じません。

「踊ったのか？」

「うむ。見たいか、こういうのだ」

と立ち上がりかけると、ろんろんは慌てて押さえるように、

「見たくない見たくない・・・先生は、その・・・意外な一面があるな」

「そうか」

「歌って踊れる文士だな」

「.....」

先生、急に恥ずかしさがこみ上げてきたのか、赤い顔をしてうつむいています。ろんろん、それを見て、

「照れるな」

「それにしても、地蔵の小説なんて、どうしたものかな……」

それを聞いたろんろんの顔がぱつと明るくなつて、

「わたし、ろんろんが、地蔵の小説、考えたぞ」

「なんだ、それは」

「笠地蔵という」

「それは、昔話だろう。小説とは違うよ」

「まあ、聞け。昔々、あるところにお地蔵さんがあつたげな」

「あつたげな、と言うところが、すでに昔話だな」

と、先生が批評をはさみます。

「まあ、聞けつたら……ある雪のいつぱいいつぱい降つた日に、

おじいさんが地蔵の前を通りかかつて、『ああ、お地蔵さんが雪に

降られて寒そうだ』と思つたげな。心の優しいおじいさんは、自分

のかぶつていた蓑と笠を、お地蔵さんにかぶせてあげたげな。する

と、その夜……」

「知っているよ。お地蔵さんが、恩返しに来るんだろう」

と、また、先生が中断させます。

「まあ、聞けな。お地蔵さんが、おじいさんの家にやって来たげ

な」

「ほら、やつぱり」

「そのお地藏さんの後から、もう一人、お地藏さんがついて来たげな」

「二人出来たのか」

「その後からも、ついて来たげな」

「三人か」

「そのまた、後からも、ついて来たげな」

「いったい、何人来るんだ」

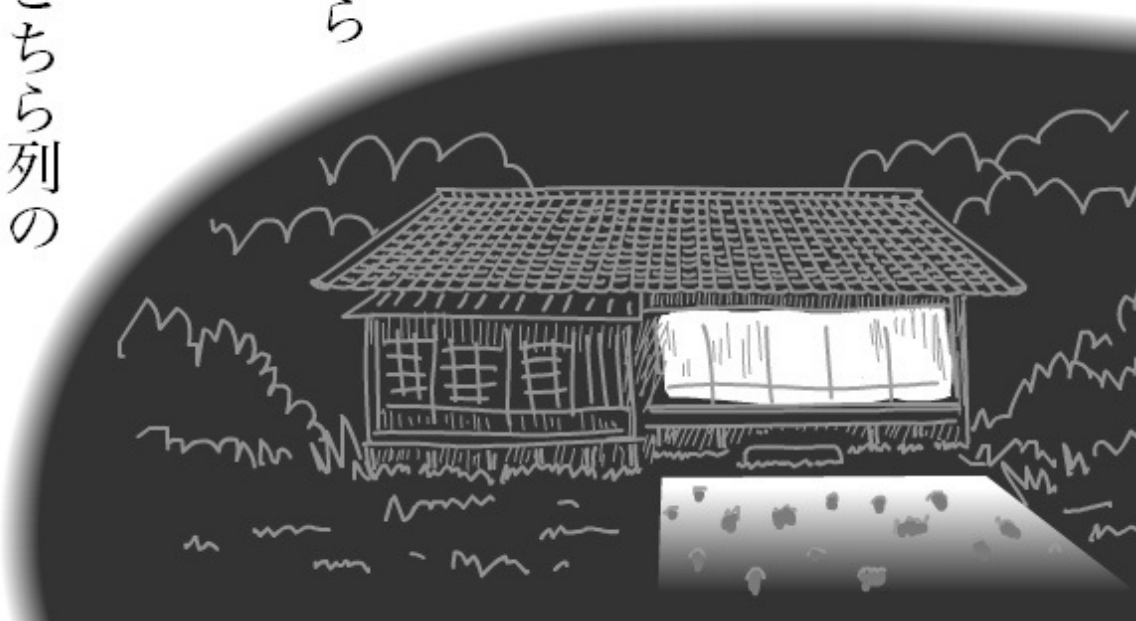
「その後からも、その後からも、そのまた後からも、そのまたまた後からも……」

「どこまで続くんだ」

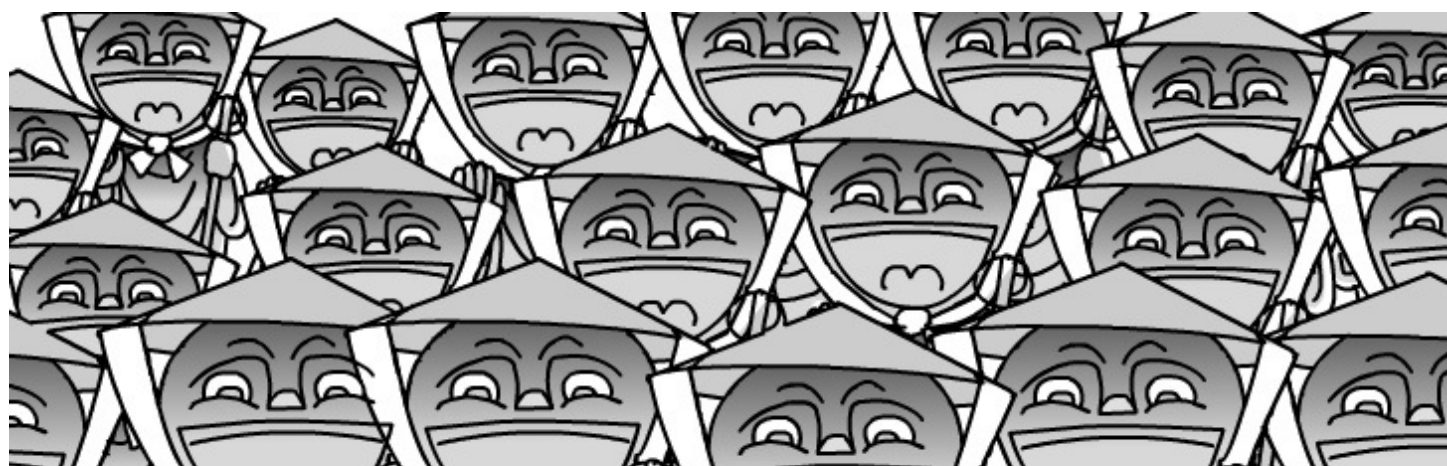
と、先生が心配そうに言いました。

「どこまでもどこまでも続くげな……はい、こちら列の最後尾になっております。お地藏さんの方は、ここからお並びください」

「なんだそれは」







「ついに場内整理が出たげな。それでも、後から後からお地藏さんは押し寄せてきて、もう、あたり一面、お地藏さんの海、石を投げればお地藏さんに当たるげな」

「それで、どうしたんだ」

「ついには、おじいさんの家はお地藏さんの海に押しつぶされてしまったげな」

「それで」

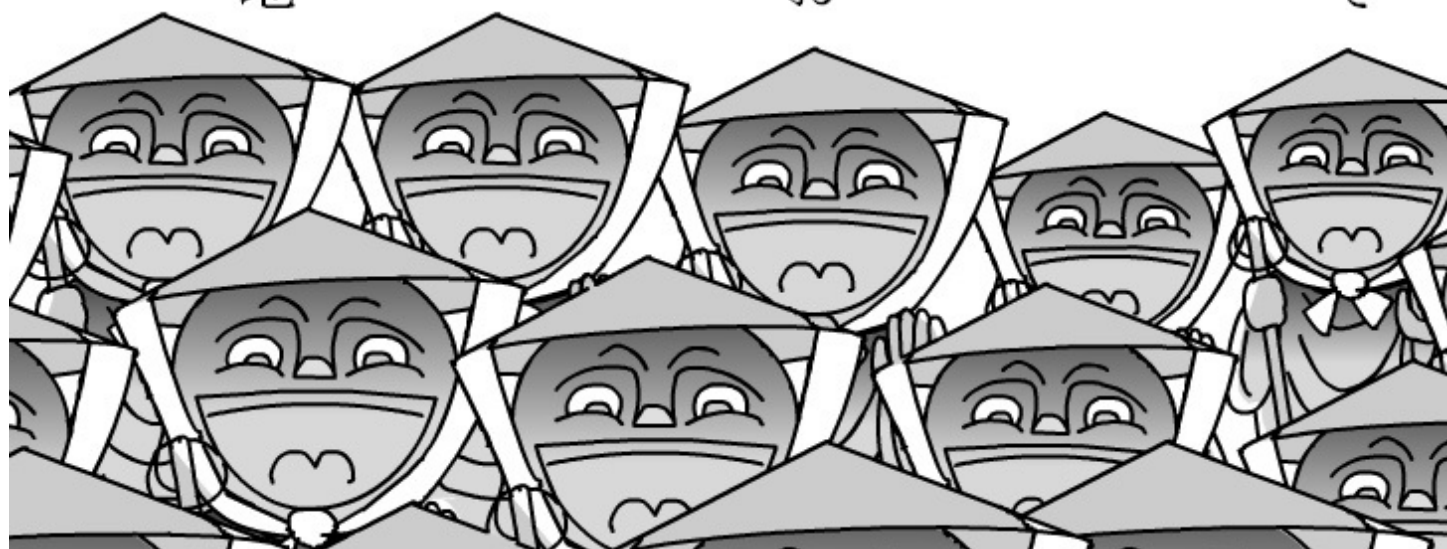
「めでたし、めでたし」

「なんだ、そりゃ」

先生は呆れています。

「わたし、ろんろんが考えたお地藏さんの小説」

ろんろんの方は自信たっぷり



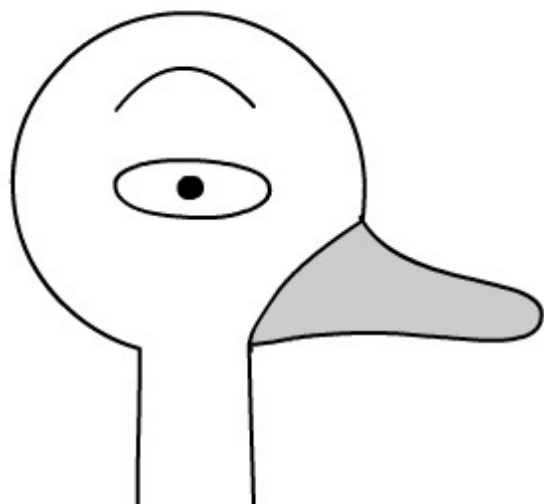
です。

「そんな小説があるか。第一、そんな話で地蔵が喜ぶか」  
「喜ばないかな」

さて、文豪先生、いかにしてお地蔵さんに小説を書いてあげるの  
でしょうか。

それは、また次回のお話。

(つづく)



## 文豪先生 第一話

<http://p.booklog.jp/book/24128>

著者：中川善史

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

発行所：ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24128>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24128>